

巻頭言

## コロナ禍における看護研究

2020年に世界規模でCOVID-19の感染が広がって以来、5類になった今もなお人々の健康や日常生活に様々な影響が及んでおり、「看護は実践の科学」という言葉の意味と重要性を様々な観点から再認識させられています。

再認識させられていることの1つ目は看護教育の中でも実践に直結する看護学実習の重要性についてです。臨地実習が学内に置き換わることが多い中、教員は様々な工夫を行い、効果的な学内実習の在り方を工夫し、その成果についての研究も発表されています。しかし、対象者に直接関わらない実習で、学生が就職後クライアントファーストの観点をどれだけ実践できるようになるのでしょうか。客観的な評価は今後看護師のキャリア形成における臨床研究の成果を待つ必要がありますが、実践の科学としての質の低下が生じないように、さらなる実習の工夫をしていく必要があるでしょう。

2つ目は実践の科学としての看護研究の在り方への影響についてです。クライアントを対象とした研究でも、医療者を対象とした研究においても、感染予防を視野に入れた調査方法の工夫が必要とされ、質問紙調査はもちろんのこと、面接調査も対面ではなくWebでの調査が主流になってきています。これらの調査方法の相違が研究結果に多少なりとも影響を及ぼしている可能性がないか、研究者が考察する際、また論文をクリティークする上でも考慮していく必要があるように思われます。

本学看護学部の教員達もコロナ禍の影響で研究がなかなか進まない中、今年度も何とか継続してジャーナルの刊行ができました。コロナ禍で大変な状況の中、研究を継続し続け発表に至った先生方に敬意を表したいと思います。

2012年にノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥氏は「高く飛ぶためには思いっきり低くかがむ必要がある」という名言を残しています。ジャーナルに発表された内容は最良ではないかもしれませんが、高みを目指す上でどのプロセスにある研究成果なのかを見極め、深みと幅をさらに広げて行ってほしいと思います。また、研究途中でまだ発表に至っていない先生方も次の機会に是非その成果を報告していただけることを期待しています。

2024年3月

広島国際大学 看護学部学部長 山崎 登志子